

健康文化

「今どきの十代」の対人関係

森田 美弥子

昨年は十代の青少年による凶悪犯罪が続き、世間に衝撃を与えた。同世代の子どもたちにとってもショッキングなのは当然だが、大人にとっては「そういった子どもたちを直接間接に育てたのは自分たちだ」という複雑な思いがある。「子どもたちの心を見失ってしまった」という戸惑いも生じている。

昨年、ある高校で次のようなアンケート調査をした。「最近、十代の少年による大変な事件が続いています。それについて次の質問に答えてください。回答は、相手に話しかけるセリフのような感じで、思うまま自由に言葉を書いてください。(1) 事件を起こした少年たちにあなたが一番言いたいことは何ですか。(2) 自分も含めて十代の少年全体に一番言いたいことは何ですか。(3) 親や先生など大人たちに一番言いたいことは何ですか。」

高1から高3まで約100名の高校生が回答してくれた。これらが現代青少年の代表的意見とまでは言えないが、彼らの「言いたいこと」からは貴重な示唆が得られたと思うので、生の回答を交えつつ概要を紹介してみたい。

(1) 事件を起こした少年たちに言いたいこと

驚き：『バカじゃん!』『サイテー!』『何考えてんの!』『何故そんなことするの?』など。自分の理解をこえたものに出くわした時、とっさに出てくるのはこれであろう。約25%の人が思わず叫んだ(と私は感じた)言葉である。

説教：『考えて行動しろ』『他人の身になって』『もっと大人になれよ』『甘えてんじゃねえ』と強い口調のもあれば、『人を傷つけるのは絶対いけないこと』『傷つくのは自分だよ』など諭しているものもある。約半数がこう回答した。1年生よりも2年、3年と学年が上がるにつれ多くなっていた。

迷惑：『十代の若者が皆同じと思われたら嫌だ』『怖くなる』など。この回答は数名と少なかったが、これがさらに対人関係への消極性や人間不信につながるかもしれないと考えると見逃せない意見である。

行動分析：『注目してほしかったのでは?』『良い子が問題だ』など。これも

数名である。冷静な評論家のようにも見えるが、他人事として距離をとりたくなる気持ちもわからないではない。

(2) 自分も含めて十代の少年全体に言いたいこと

善悪・正義・秩序：『思いやりを大切に』『責任をもって』『ルールは守ろう』『普通でいたい』『考えて行動すべき』『自由にやるのはよいが迷惑をかけずに』など。過半数がこのように回答した。しごくまっとうな意見である。学年が上がるにつれて割合が増えていた。

仲間・ふれあい：『信頼できる友だちをつくろう』『家族を大切に』など。約10%であったが、関係を求める気持ちと理解した。

励まし：『頑張ろう！』など。これも10%ほど見られた。自分に対して言っているのだろうか。嫌なことなど吹き飛ばして明るくいこう、というニュアンスを感じた。

(3) 親や先生など大人たちに一番言いたいことは何ですか。

敬遠・拒否：『うるさい』『放っという』『大キライ』『嘘つき』『勝手』『無責任』など。かなり多いのではないかと予想していたので、30%という回答結果はやや意外であった。1、2年生に比べ3年生に多かった。

批判・要望：『中途半端にやさしくするな』『社会の責任を自覚して』『きちんと指導を』など。15%とやや少ないが、単なる不満や反発ではなく、大人に意見するような言い方になっている。2年生に多かった。

被受容・理解：『わかってほしい』『気持ちを聴いて』『価値観を押しつけるな』『外見で判断するな』など。これが最も多く、40%ほど見られた。

以上の内容は、アンケートの回答者100名を含む約1000名の全校生徒を前にして「十代のコミュニケーション」というタイトルでお話をさせていただいた。講演をする、という課題がまずあり、コミュニケーションというテーマをたてたからには何らかの相互交流をしたかったのだが、1対1000という状況では一方向的な情報伝達しかできそうにない。そこで、事前にアンケート調査を実施して、その結果をフィードバックすることで、聴衆となる高校生にも参加してもらおうと考えたわけである。

このアンケート結果から何を読みとることができるだろうか。まず第一に、新聞紙上をにぎわすようなとんでもないことをしでかした少年たちと一般の十代とはやはり大きな隔りがあるということである。それは当然のこのようだけれど、確認しておく必要がある。

アンケートの回答には、「人を傷つけるのは絶対いけない」「被害者の身になって」「人を物のように扱ってはダメ」「自分を大切に」など、“いのちの大切さ”が強調されていた。また、「ルール」「責任」「思いやり」といった“社会の常識”をあらわす言葉が何度も登場していた。こんな優等生的回答はマユツバものだと感じる人が多いかもしれない。しかし、じゃあ何て答えればいいのか？と高校生たちは言うだろう。反抗すれば叱られ、正論を吐けば疑われ、では確かに立つ瀬がない。こういった反応が学年とともに増加していく点にも注目したい。大人に近づくほどタテマエを正々堂々と言えるようになるということだろうか。

「キレル」「ムカつく」という言葉が十代の代名詞のようになって久しいが、ごく最近の少年犯罪は、キレたりムカついた結果生じたのではない場合がむしろ多い。理由がつかみにくく、善悪の区別が“本当に”わかっていないとしか思えない。そのような事件は絶対数は少ないのだが非常に目立つ。通常感覚では越えられない一線を越えてしまった不可解さが強烈な印象を与えるからだと思われる。

普通の子が犯罪を起こす時代になったと言われることがあるが、やはり普通の子の普通感覚は捨てたもんじゃない、と私は思っている。残酷な事件を聞いて素朴に驚いたり腹をたてたり怖がったりする、それは人間として大事なことだ。

第二に指摘したいのは、彼らは、家族や友達とのつながりを求めているということである。より厳密に言うならば、“愛され願望”が強いのではないかとと思われる。

親や先生に対して、全体としては不満や批判、拒否の感情が表明されやすいのは、第二反抗期である青年期ならではのことであろう。しかし、最も強調されていたのは「わかってほしい」という訴えだった。「中途半端にやさしくするな」「(子どもを)きちんと指導しろ」という批判も、もっと関わってほしいとの要望が含まれている。高校生は、自分一人で生きていくからいいよ、とはまだ言えない。ただし、3年生になると「放つといて」が増え、脱依存に近づいていくようである。

親離れが徐々に進行すると同時に、自分なりの生き方を模索していくようになるのが青年期と言われている。自分の世界を創っていく際に友人関係は重要な役目を果たす。アンケートでも、同世代に対するスタンスは大人に対するそれとは異なっていた。否定的なニュアンスはなく、「友達は大事」であったり、「一緒に頑張ろう」だったりする。とても明るい。なんだか明るいだけ、と見るの

は意地悪だろうか。ネクラを嫌い、ネアカであろうとする最近の風潮を反映している気がする。

ネアカでありたいのは、傷つきを回避するためらしい。2年ほど前、大学で1年生の演習授業で司会役の学生に、指名して発言してもらったらと指示を出したら、困った顔になって「ゴメンね」と言いながら当てている。同級生に対してこんなことまで気を遣うのかと驚いた。相手の嫌がることをして傷つけない。それによって嫌われたら自分も傷つくことになる。嫌われたくないという発想はわかるが、ちょっとデリケート過ぎるんじゃないの？と、言いたくなってしまう。その授業で、電車やバスで席を譲るかどうかの話題が出た時、もし断られたら周りの人に笑われる気がして恥ずかしいから寝たふりをする、と言う学生が何人かいた。これは先の例よりは理解できたが、万事がこの調子では大変だ。今どきの十代の対人関係は、リンゴの皮むきや鉛筆削りと同様、見ていて少々もどかしい。

ここで述べてきた2つの特徴の共通点は“やさしさ”である。ところが、第一にあげた“いのちの大切さ”や“社会常識”にもとづくやさしさと、第二にあげた“愛され願望”や“傷つき回避”にもとづくやさしさとでは質がずいぶん違う。前者は時代や文化を越えた人間性そのものであり、それは今どきの若者であろうとも基本的には失われていない。他方、後者は徐々に変化してきた社会や家族の影響を受けて知らず知らずに現代人が身につけつつある対人パターンだといえる。このまま進んでいくと、対人関係はますます希薄化・表層化してしまい、人間性さえ変えてしまうかもしれない。

そうさせないために個人個人ができることは、率直なコミュニケーションしかない。ちょうど今、テレビでは、あちこちの成人式風景が紹介されている。マナーの悪い若者に逆ギレして「出ていけ！」と怒鳴っている市長さんたちに、私は心の中で声援を送った。「ルールは大事」と言うからには守ってもらおうじゃないか、「中途半端に甘やかさないで」と望んでいるからには厳しくしてやろうじゃないか。そういうコミュニケーション、そういうつながりを若者自身が求めているはずなんだから。

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授)